

「震災で消滅の危機にある福島県内伝統文化芸能の調査研究および次世代継承のためのシンポジウムとワークショップ」事業

連綿と受け継がれてきた郷土の伝統芸能が危機に瀕するなか次世代に残していくための記録化と継承事業に奮闘する

後継者難から消滅の危機に瀕していた福島の郷土芸能・民俗芸能の世界を、さらなる悲劇が襲った。大震災や原発事故で後継者となる子どもたちや指導者が地元を離れざるをえなくなるなか、次世代に継承していくために、それらを記録にとどめ、伝統文化の普及に努める団体が立ち上がった。

日本の伝統文化を次世代の若者に広げるため若者と一緒さまざまな活動を展開する

民俗芸能や郷土芸能の多くに共通して見られるのは、後継者難の問題である。若手と呼ばれる人たちでも60代というケースは決して珍しくなく、地域の人々によって担われてきた伝統を、いかに次世代に継承していくかは大きな課題である。

福島県内にも国・県・市レベルで重要無形民俗文化財に指定されているものをはじめ、伝統芸能と呼ばれるものは多いが、やはり存続の危機にあった。それでも、機会を捉えては小・中学生などに伝授することで命脈をつないできたが、「教える人も、学んでいた子どもたちも、結果的に東日本大震災や原発事故で地元を離れざるをえなくなった人が多い。こうした芸能は、人から人に伝えることで持続できるものだけに、一度途絶えてしまうと復活させることが難しい。それでなくても教える側の高齢化や学ばふ側の少子化などの問題を抱えていただけに、消滅の危機にあるといっても過言ではないと思います」と語るのは、「福島 伝統文化みらい広場実行委員会」の花柳沙里樹さん。

同委員会は、日本の伝統文化を次世代を担う若い人たちに広げることを目的に設立された団体で、文化庁委嘱事業「伝統文化こども教室」を主宰した日本舞踊や邦楽の関係者により、2009年に発足した。以来、伝統文化の一流パフォーマーを福島に招聘し、同じ舞台上に立ったり、ワークショップなどで刺激を受けることによって子どもたちが伝統の深さと楽しみを学ぶ定期公演「伝統文化

みらい広場」を行ったり、文化庁主催の観光振興・地域活性化事業、老人福祉施設慰問、福島県・市の文化祭などでの公演に積極的に参加してきた。現在は、障がい者の団体である「さをり織りクラブ」などを含め、7団体、約120名のメンバーで構成されている。

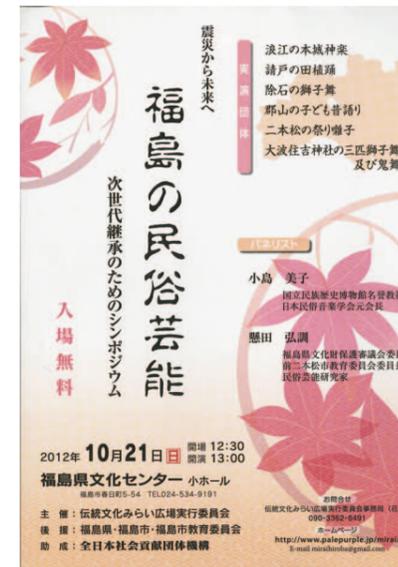
助成によって実現した伝統芸能の記録化と青少年が集ったシンポジウム＆ワークショップ

花柳さんたちは、消滅の危機にある福島の伝統芸能や民俗芸能を調査研究し、文書化や映像化をして記録に残すと共に、それらの芸能を次世代に継承するための具体的な推進事業として、シンポジウムとワークショップを開催することを決定、その活動資金にAJOSCの助成が活用された。

「調査研究では、国立歴史民族博物館・名誉教授の小島美子先生、福島県文化財保護審議会委員の懸田弘訓先生に指導を受け、私たち実行委員会も同行しました。それを懸田先生の監修のもとにまとめた冊子が『福島県の民俗芸能と東日本大震災』です。記録化にあたっては、特に狭い地域や集落で代々受け継がれてきた素朴で生活に根差したものに焦点を当てました。調査研究に同行して、こんなにすばらしいものや奥深いものがあつたんだ



福島県浪江町請戸地区に古くから伝わる「請戸の田植踊」を披露する子どもたち



シンポジウム＆ワークショップ「福島の民俗芸能」のチラシ

など改めて感動すると共に、それを広く発信して認知してもらった必要性を感じました。また、こうした芸能が、自分たちの誇れる文化であることを子どもたちに伝えたいと決意を新たにしました」と、花柳さん。

さらに、昨年10月21日には、次世代継承のためのシンポジウム＆ワークショップとして「震災から未来へ 福島の民俗芸能」を福島県文化センターで開催。第1部では小島・懸田両氏をパネリストとするシンポジウム、第2部では「浪江の本城御神楽」、「大波住吉神社の三匹獅子舞」のほか、子どもたちが中心となる「除石の獅子舞」、「請戸の田植踊」などが実演された。

「子どもたちがやらされているという意識では、本当の意味での継承とは言えません。彼らが主体的に関われるもの、さらには自らが身につけた芸能を相互に教え合う



福島県梁川町で400年前から伝わる「除石の獅子舞」

担当者より



伝統文化の価値を福島から発信したい。

福島 伝統文化みらい広場
実行委員会
事務局
花柳沙里樹さん

消滅の危機にあった福島の民俗芸能は、震災により壊滅すると思われましたが、AJOSCの助成・支援により、その重要性が認識され、今ではバラバラになった地域をつなぐ役割を果たすと共に、再生へ向かおうとしています。小さな活動ではありますが、次世代を担う人たちとともに、伝統文化のすばらしさを福島から発信していきたいと思ひます。

ような交流の場、絆を確かめ合えるような場を用意する必要があったと感じていました。その意味で、今回のシンポジウムは格好の場となりました。「田植踊」を舞う子どもたち同士は久しぶりに会うこともあり、高揚していましたが、津波で親を亡くした子どもも一生懸命踊っていました」と、花柳さんは話す。

花柳さんたちは、この子どもたちが持つエネルギー、感性、発想といったものが震災後の福島はもとより、これからの日本を支えていく原動力になると信じ、その活動を見守るための新たな組織として、若い人たちを中心とした非営利の一般社団法人を2013年度中に立ち上げるという。その展開、発展が楽しみである。



福島に伝わる伝統芸能は、後世に残すため映像として記録に残された